

『説文解字』「許敍」段注についての一考察

——「文者錯畫也」をめぐって(中)——

田村(大田)加代子

はじめに

拙論「『説文解字』「許敍」段注についての一考察——「文者錯畫也」をめぐって(上)——」(『名古屋大学文学研究論集』六二)において、段玉裁が『説文解字』中の某字に注を施すにあたり、同書中の許慎の説解(以下「説解」と略称する)を引用したり参照したりしつつ、どのように『説文解字』内部の整合性を図ろうとしているかについて、段玉裁が「錯」字を「遣」字とすべきだとした論拠をたどることによって、考察を行った。段玉裁が「錯」字を「遣」字にすべきだとした理由、そこから派生して「遣畫」とは何かという問題、さらに「畫」とはどのような意味範疇に属し、そこから「文」(文字)と「繡」(刺繡)と「畫」(繪畫)とをどのような関係性の中に位置づけるべきかという問題についての段玉裁の見解を順を追って見てきた。

問題の発端は、許慎の自敍(以下「許敍」と略称する)にあった。許敍の冒頭近くに「倉頡之初造書、蓋依類象形。故謂之文。」

『説文解字』「許敍」段注についての一考察(田村(大田))

(倉頡の初めて書を造る、蓋し類に依り形を象る。故にこれを《文》と謂ふ。)とあり、段玉裁の注(以下「段注」と略称する)に「文者遣畫也」とある。これは、『説文解字』(以下、適宜『説文』と略称する)本篇の「文」字の説解を引用しているのだが、

説解では「錯畫也」と作っているのに対して、段注では「錯」字を「遣」に作るべきであるとしている。それに呼応して、「許敍」の段注も「文者遣畫也」と作っているのである。

本稿では、前掲の拙論に引き続き、「文者遣畫也」という段注を発端として、「文」字をめぐる段玉裁の注と許慎の説解との関係の一端について考察を試みる。章立ては前掲の拙論からの通し番号とする。

以下、断りの無い限り、本稿でテキストとして用いるのは、一九八一年上海古籍出版社刊、經韻樓藏版の影印本である。

問題の所在

『説文解字』文部の「𠄎」字の説解を見ると、

【説解】

𠄎、錯畫也。象交文。^①

【説解訓読】

𠄎は、錯畫なり。交文に象^{かたど}る。

【説解訳文】

「𠄎」は、交差した線状のものである。交文を象^{かたど}っている。

とある。これは、「𠄎」字の説解に「文」字を用いる、一種の同語反復である。このような同語反復の説解は『説文解字』の中に散見されるが、この問題についてはいまは論じない。

「文」の小篆は「𠄎」、「交」の小篆は「𠄎」であるから形状が似ている上に、「𠄎」字の説解には「𠄎、交脛也」とあり、ここでも同語反復になっている。「A、交B也」という説解は『説文』中に複数あり、その例は前掲論文でも取り上げた。「交」字の説解に対して、段玉裁は、「交脛」のことを「交」と限定的に言うのが本義で、「凡そ兩者相ひ合ふは「交」と曰ふ。皆、此の義、引申段借なり。」（一般的に、二者が交會するのを総じて「交」と言うが、その用法はいずれも、「交脛」の「交」字の本義

を引き伸ばした派生義とし音を借りて意味を託した、引申と仮借の用法である。）と言う。これが段玉裁の見解である。

交錯した形を表す「交」字について見てみると、説解では「交は、交なり」と言っている。「交」の小篆は「𠄎」で、「文」「交」「𠄎」はいずれも二本の線が交差していて、形状が類似している。ここまでの「文」「交」「𠄎」の説解を合わせると、

文 || 交文 ……………①
交 || 交脛 ……………②
交 || 交 ……………③

①と③より、文 || 交文、また①と②より、文 || 交脛文となる。後述するように、「文」には二次元的側面「交文」と、三次元的側面「交脛文」とのふたつの側面があることが浮かび上がってくる。

議論を「文」字に戻す。許慎の説解に対する段注は、

【段注】

錯、當作遣。

遣畫者、逡遣之畫也。

「考工記」曰、「青與赤謂之文。」遣畫之一端也。

遣畫者、文之本義。

彰彰者、彰之本義。

義不同也。

黄帝之史倉頡見鳥獸遞近之迹、知分理之可相別異、初造書契、依類象形、故謂之文。

【段注訓読】

「錯」は、當に「造」に作るべし。

「造畫」は、造遣の畫なり。

「考工記」に曰く、「青と赤とはこれを文と謂ふ。」と。「造畫」の一端なり。

「造畫」は、「文」の本義なり。

「彰彰」は、「彰」の本義なり。

義、同じからざるなり。

黄帝の史、倉頡は、鳥獸の遞近の迹を見、分理の、異なるを相ひ別つべきを知り、初めて書契を造るに、類に依り形に象る、故にこれを「文」と謂ふ。

【段注訳文】

「錯」の字は、「造」とするのが妥当である。

「造畫」というのは、縦横斜めに交わりあった、線状の境界線である。

『周禮』『考工記』の「畫續」に言う。「青と赤が交わったものを「文」と謂う。」と。これが「造畫」の始まりである。

「造畫」が「文」の本義である。

「彰彰」が「彰」の本義である。

『説文解字』許敍「段注」についての一考察(田村(大田))

「文」と「彰」とは本義は同じではない。

黄帝の書記官、倉頡は、鳥獸の足跡が種類によって異なるのを見て、文字の原理とは異なるものを区別することができるとののだと気づき、初めて書契を創造するにあたり、類型を抛り所とし、事物の形を象するという方法に依った。だから、これを「文」と呼びなすのである。

前掲の拙論では、この段注の前半部分、「錯、當作造。造畫者、造遣之畫也。考工記曰、青與赤謂之文。」について考察した。本論では、「考工記」の引用を承けた「造畫之一端也」の一句と、それに続く後半の「造畫者、文之本義。彰彰者、彰之本義。義不同也。」の意味、そして、この注の末尾に許敍の一節がなぜ引用されているかを明らかにするための前提となる幾つかの点について考察する。

ここで前掲の拙論の内容をまとめておく。段玉裁が許敍の「文」に対して「文者造畫也」と注していることを踏まえて『説文』本編「𠄎」字の説解「交文」を換言すると、「文」とは「造」する「畫」であり、「縦横斜めに交わる」「畫」の形を象った文字であったことを示した。また、段玉裁は、「畫」は彩色を施す絵画・刺繍・絵画や刺繍の図案としての文字を総称するものとして考えていることも論証した。さらに、「造遣」する「畫」である「文」の起源の抛り所として、『周禮』『考工記』の「畫續」

を根拠にしていることも確認した。すなわち、青と赤とを交えたものを「文」と謂う、という記述である。段玉裁は、それが「遣書」、すなわち「交文」の始まりであると言う。

ここで俄には解し難いのは、①なぜ「文」の「一、端」を示すのに「考工記」を引く必要があったのか。また、②なぜ「文」を説明するために「彰」を引き合いに出す必要があったのか。さらに、③なぜ「文」と「彰」の本義が異なることを殊更に言う必要があったのか。「彰」は明らかに「文」の孳乳字である。「彰」も「章」の孳乳字である。「文」「章」が音符、「彡」が義符である。厳密に言えば「章」は『説文』音部にあり、「音」と「十」との会意として説明されている。また、④この注を結ぶのに、なぜわざわざ「許敍」の一文を一言も違えず引用して、「故にこれを《文》と謂ふ」と言う必要があったのか。

「𠄎」字の段注を読む限り、段玉裁の思考の過程は明示されていない。「文」についての極めて特化した注解の背景にどのような思考過程があるのか、本稿では、①「文」について、なぜ段玉裁が『周禮』『考工記』を引き、②／③なぜ「文」と「彰」との本義の違いに言及し、④なぜ「許敍」の「文」の定義を引用したのかを跡づけしながら、段注が『説文解字』の説解とどのような有機的関係を保ちつつ展開されているかを探ることを最終的な目的とする。

本稿の主眼目は、段玉裁の思考過程を推理し跡づけすることに

よって段玉裁の言語観の一端を浮かび上がらせることにあり、段玉裁の意図を実証するものではないし、段玉裁の注の是非を論ずるものでもないことを付言しておく。

ふたつの仮説

本論に先だつて、ふたつの仮説を述べておこうと思う。

はじめに「遣書之一端也」についてであるが、この一句は、『説文解字』第十五下に載せる後叙(四字句、押韻あり)の冒頭に、

【後叙】

其建首也、立一爲^①、方以類聚、物以羣分、同條牽屬、共理相貫、襍而不踰^③、據形系聯、引而申之、以究萬源、畢終於亥、知化窮冥^④。

【後叙訓読】

其の首を建つるや、「一」を立てて「端」と爲す。方は類を以て聚め、物は羣を以て分つ。條を同じうするは牽屬せしめ、理を共にするは相ひ貫く。襍りて踰へず、形に據りて系聯す。引きてこれを申し、以て萬源を究む。畢に「亥」に終り、知化窮冥す。

【後叙訳文】

『説文解字』において部首を建てるに際しては、「一」部を立

てて最初の部首とした。天地の性理は同類によって聚める働きをし、万物の情理は同群によって分つ働きをするものである。文字構造の条理を同じくする文字は引き連ねて同じ部首に属させ、文字構造の条理が共通する文字はひとつの部首に一貫させた。義符が異なったら部首を跨ぐことはせず、五百四十部は部首の字形に依拠して順番に配列した。最初の一部の「一」という形から始めて、引き伸ばして引き伸ばして、第五百四十部の亥部の「亥」という形まで至り、それによって天地鬼神から人間人事まであらゆる文字の源を究明した。その手順を悉く尽くして「亥」で終わり、万物の変化の道を曉知し微細にして奥妙なる神明を窮め尽くした。

とあるのを踏まえているのではないか、という仮説である。ここで注目したいのは、許慎が『説文解字』を著すにあたって「一」を「𠄎」とし「亥」にて畢く終わる、と言っている点である。段玉裁がこの「𠄎」字を以て「考工記」の「畫績」にある「青與赤謂之文」という記述が「遣畫」の「一𠄎」であると説明していることと、許慎の後叙に「立一爲𠄎」と言っていることとは無関係ではないだろう。さらに加えれば、「亥」の説解ではこの文字を男と女と子と解し、男_一、女_二、子_三で世界が完成し、また「一」部に戻るといふ循環思想が見られる。⁵⁾このように考えると、前掲の拙論で述べた、「考工記」「畫績」における色の循環と

も重なる。

第二に、「文」と「𠄎」の本義に言及した理由についてであるが、「錯畫」を「遣畫」と改めた注と関係があるのではないかという仮説である。「錯」と「遣」とは本義が異なること、「交」と「送」とは本義が異なること、従って「交錯」は「送遣」と作るべきだと主張することと関連して、あるいはそのように述べることを利用して、「文」と「𠄎」も本義が異なること注することに、本義を明確に区別し、誤用を正そうとしたとも考えられる。「文」が許慎の言うところの《文》、すなわち物象の本、「𠄎」が許慎の言うところの《字》、すなわち孳乳字であることを、「交錯」と「送遣」に言及したことを契機とし、「文」字の説解の注という形を借りて明示したのではないだろうか。明示というよりは、むしろ、段玉裁の時代には本義が忘れられ「文」と「𠄎」とが混用される事態を正そうとしたとも考えられる。それが、「義不同也」の四字に決然と表れている。加うるに、段玉裁は『論語』の「正名乎」の「名」を「文字」と解釈する説に与している。「名」を「名分」と解するのが多数派であるにも拘わらず、敢えて「文字」と解したことと、ここで「文」と「𠄎」の本義に言及したことは、無関係ではないと考える。この点については稿を改めて別に論じる。

以上のように考えると、段注の最後に、許慎が「文」を定義した一節を引用したことにも説明がつく。「錯畫」の「錯」字を本

義によって正し、「文」の原初的な用例を「考工記」に見出すことよって「彰」と対比しつつ「文」の本義を確認し、その証左として許敘の言葉を用いた、と考えると、一見ばらばらに見える段注には流れがあつて、一連の論理的必然性があるが見えてくる。

以下、この仮説について検証する。

五、「文」について (二)

前掲の拙稿の「五、「文」について(一)」に引き続き、段注「文者錯畫也」の「文」について論を進める。本稿の冒頭で引用した段注の要点は、以下の三点である。

- (一)『周禮』「考工記」「畫績」の「青と赤とを交えるのを「文」と謂」い、それが「遣畫」の始まりであるということ。
- (二)「文」の本義は「遣畫」であり、「彰」の本義は「彰彰」であるので、「文」と「彰」とは、同義ではないということ。
- (三)倉頡が文字の原理に気づき、書契を創造する際に、類型に依り事物の形を象するという方法に依った。だからこれを「文」と呼びなすのだということ(許叙の引用)。

いま問題にしている「文」字の段注では、「文」という呼称の最初の用例を挙げ、次に「文」の本義は「會あひさつて遣まじつた異なる色や線」であり、「彰」の本義は「彩あきらなす文様の彰あきらかさ」であ

り、「文」と「彰」の二者には本義の上で区別があることを指摘し、最後に許敘の「文」の定義を引用するという順に論を進めている。なお、「遣畫」の解釈については、前掲の拙稿を参照されたい。また、段注の後半「黃帝之史倉頡」以下「故謂之文」までについての詳注は、拙稿『説文解字』『許叙段注』訳注の試み(一)(『饜飿』第二十二号)を参照されたい。

五の二、「績」について

まず第一の点について検討する。段玉裁が許敘の「倉頡之初作書、蓋依類象形、故謂之文」において「文者遣畫也」と注していることを最初の手がかりとして『説文』本篇を見ていくと、「畫」は「繪」であり、「繡」と同じように色を施す手工であるという意味でひとつの類概念で括ることができ、さらに、絵画や刺繡の図案として「文字」が用いられることもあるため、「畫／繪」と「繡」と「文」とをひとつの概念で括るのが古の考え方であったという議論を展開している。その注で段玉裁は、古は「績」は「畫」と訓じ「繪」は「繡」と訓じたことを述べ、この点については「績」字の注で詳説したと言っている。そこで、まずは『説文』糸部「績」字の説解と段注を見ておく。

【説解】

績、織餘也。【段注①】一日畫也。【段注②】从糸、貴聲。

【説解訓読】

繒は、織餘なり。一に曰く畫なり。糸に従ひ、貴の聲なり。

【説解訳文】

繒は、織布の余った糸端である。一説に「績」は「畫」であるという。「糸」を義符とし、「貴」は音符である。

【段注①】

此亦兼布帛言之也。

上文「機縷」爲「機頭」、此「織餘」爲「機尾」。

「績」之言「遺」也。故訓爲「織餘」。

「織餘」、今亦呼爲「機頭」、可用糸物及飾物。

『急就篇』「纂」「績」總爲一類、是也。顏、王注未諦。⁶

今則此義廢矣。

【段注①訓読】

此れも亦た、布帛を兼ねてこれを言ふなり。

上文の「機縷」は「機頭」爲り、此の「織餘」は「機尾」爲り。

「績」の言は「遺」なり。故に訓じて「織餘」と爲す。

「織餘」は、今、亦た呼びて「機頭」と爲し、糸物及び飾物に用いるべし。

『急就篇』に「纂」「績」總じて一類と爲す、是れなり。顏、王の注は未だ諦つまびらかならず。

『説文解字』許敍「段注」についての一考察(田村(大田))

今は則ち此の義廢れり。

【段注①訳文】

この「績」というのは、「績」字より前に親字として列挙されている「織」字(弌)より以下「紆」「綜」「縹」「縹」と同じく、麻布と絹織物とを兼ねて言っているのである。

「上文」、すなわち「績」字より前に配列されている「紆」字の説解で「紆」は「機縷」であると言っているが、「機縷」とは「機頭」(機織りの織り始め)のことであり、ここで「績」は「織餘」であると言っているが、「織餘」とは「機尾」(機織りの織り終わり)のことである。

『説文』では「績」は「从糸貴聲」、「遺」は「从辵貴聲」と、いずれも「貴」を音符とする形声文字として説解しているところから、音義が相通じる。「遺」は反訓で、ここでは「残余」の意。だから、「績」を訓じて「織餘」としているのだ。

「織餘」のことは、現在では「機頭」とも呼び爲し、織物にも房飾りにもこの語を用いることができる。

『急就篇』では「纂」と「績」を総べて一類にしているのがその証拠である。『急就篇』の顔師古注と王應麟補注では、その点が十分には審らかになっていない。

現在では、「績」が織物の織り終わりの残り糸や房飾りであるという意味は廢れて用いられなくなってしまった。

【段注②】

四字依「韵會」補。今所傳小徐繫傳本、此卷全闕。^⑨黃氏作「韵會」時所見尚完。知小徐本有此四字也。

畫者、介也。今謂之畝畫。

「績」、「畫」、雙聲。

「考工記」曰「設色之工、畫、績、鐘、筐、篋、幌」^⑩。

又曰、「畫績之事、襍五采。」

「咎繇謨」「日、月、星辰、山、龍、華蟲作繪。」鄭注曰、「繪讀曰績。」「讀曰」猶「讀爲」、易其字也。以爲訓「畫」之字當作「績」也。「繪」訓「五采之繡」。故必易「繪」爲「績」。

鄭司農注『周禮』引『論語』「績事後素」。

【段注②訓読】

四字は『韵會』に依りて補ふ。今、傳はるところの小徐繫傳本は、此の卷、全て闕く。黃氏、『韵會』を作りし時に見るところ、尚ほ完し。小徐本に此の四字有るを知るなり。

「畫」は、「介」なり。今、これを「畝畫」と謂ふ。

「績」、「畫」は、雙聲なり。

「考工記」に曰く、「設色の工は、畫、績、鐘、筐、篋、幌。」

又た曰く、「畫績の事は、五采を襍ゆ。」^⑩

「咎繇謨」に「日、月、星辰、山、龍、華蟲もて繪を作れ。」とあり。鄭注に曰く「繪は讀みて績と曰ふ」。「讀みて曰ふ」は、猶ほ「讀みて爲す」の如くして、其の字を易へるなり。

以爲く「畫」字を訓ずるに當に「績」に作るべきなり。「繪」は「五采の繡」と訓ず。故に必ず「繪」を易へて「績」と爲す。

鄭司農『周禮』に注して『論語』の「績事後素」を引く。

【段注②訳文】

「日畫也」の四字は、『古今韵會』に依って補った。現在伝わっている小徐繫傳本(徐鍇の『說文解字繫傳』)は、この卷(卷第二十五、糸部から卵部までの十二篆)を全て闕いている。黃公昭が『古今韵會』を作った時に見た『說文解字繫傳』は、まだ完本であった。そこから小徐本にこの四字があつたことがわかるのである。

「畫」は、「介」である(※田村注:『說文』の文)。今ではこれを連語にし、「介」字には義符の「田」を加えて「畝畫」と言う。

「績」と「畫」とは双声である。

『周禮』「考工記」に言う。「凡そ……施色の工は五つあり、……施色の工は、畫(絵画)、績(絵画)、鐘(羽毛染め)、筐(闕)、幌(帛の漂白)である。」

「考工記」はまた次のように言っている。「畫績の仕事は五采を襍えることである。」

『尚書』「咎繇謨」に言う。「日、月、星辰、山、龍、華蟲を凶案にして繪を作れ。」その鄭注に言う。「繪」は「績」と

読む。「讀曰」というのは「讀爲」と言い換えても同じで、単にAという文字がBという意味であるということではなく、Aという文字をBという文字に置き換えることである。つまり、「畫」字を訓じるのに「績」字に置き換えるのが妥当であるとするのである。「繪」は「五采の繡」（※田村注：『説文』の文）と訓じている。だから、必ず「繪」字を「績」字に置き換えなければならない。

鄭司農は『周禮』に注して『論語』「八佾」の「績事後素」を引用している。（※田村注：今見る論語では「繪事後素」に作る。）

【段注①】の主旨は、「績」とは「遺」、すなわち「残餘」のことで、麻布、絹織物に拘わらず、織布を織り終えた端の余り糸が本義である、ということである。

注の最初に「亦」と言っているのは、「績」字の説解よりも前にある「織」字の説解に「布帛を作るの總名なり」とあるのを承けて「績」も同様に麻布絹織物の別なく、の意を表している。後述する「織」字の段注にあるように、この糸部の親字の配列は、麻糸と絹糸、麻布と絹織物を分かつか分たないかと関わりがあるため、「麻」か「帛」かが常に問題になる。「布」は麻糸で織つたもの、「帛」は絹糸で織つたものであるが、どちらの糸で織つても、縦糸と横糸とを交差させテクスチャーを織り成す作業なら

ば均しく「織」と総称する、その「織餘」が「績」である、ということである。

では、次に「織」について見てみよう。①なぜ『周禮』の「考工記」を引用したか、また、なぜ「文」の本義を明らかにするために「彰」を持ち出す必要があったのか、を説明するためには、迂遠なようであるが、糸部の文字群がどのような配列になっているか、それらについて段玉裁がどのような注を施しているかを確認しておく必要があると考える。

五の二、「織」について

いま、「績」は「織餘」であると言っているので、「織」について改めて見てみると、「織」字の説解に、

【説解】

織、作布帛之總名也。

【説解訓読】

織は、あまのきぬおりもの布帛なを作すの總名なり。

【説解訳文】

織は、麻布や絹織物を織ることを総称した言い方である。

とあることから、麻糸と絹糸とに拘わらず、縦糸と横糸とを交互に交差させて麻布や絹織物を織り成すことが「織」の本義である

ことがわかる。

先に見た段注で「機縷」は「機頭」、「織餘」は「機尾」と言っていることから、「織餘(≡織尾)」と「機縷(≡機頭)」とは対になっているものとわかる。「織餘」は、「績」字の説解にある言葉で、「機縷」は、「績」字よりも五つ前にある「紵」字の説解にある言葉である。

ちなみに「縷」とは、説解には「縷、綫也」(縷は、綫なり)とあり、段注では「鄭司農、『周禮注』曰、「綫、縷也。」此本謂布綫。引申之、絲亦併綫。」(鄭司農、『周禮注』に曰く、「綫は、縷なり。」と。此れ本と布の綫を謂ふ。これを引申して、絲も亦た綫と併す。)と、鄭司農の『周禮注』を引いて、「綫」はもともと麻布を織る麻糸だけを指していたが、それを引申して絹織物を織る絹糸(絲)も指すようになったことを示し、「縷」が「綫」であり、「綫」が「縷」であるならば、これは互訓であるから、「縷」も「綫」も麻糸絹糸の両方を指し示し得るという結論に導く。前述したように、麻糸なのか絹糸なのか、「布(麻布)」なのか「帛(絹織物)」なのかということは、『説文』糸部の構成及び親字の配列と関係があり、段注も糸部の文字相互に言及し、麻か帛のどちらかなのか、麻と帛の両方なのか傾注している。

五の三、糸部の構成(一)「麻」「帛」「縷」「絲」及び色柄織物に

ついて

本節では、糸部の構成のうち、麻と絹に関する文字について見ていく。次節では縦糸、横糸、色彩についての説解を取り上げ段注とともに論じる。

「織」の段注に次のようにある。

【段注】

布者麻縷所成、帛者絲所成、作之皆謂之織。許此部別布於絲。自「緝」篆至「緝」篆二十六字皆言「布」也。而有不可分者、如「織」篆、是也。經與緯相成曰「織」。

【段注訓読】

「布」は麻縷の成すところ、「帛」は絲の成すところ、これを作るは皆なこれを「織」と謂ふ。許、此の部、「布」を「絲」より別つ。「緝」篆(緝)自り「緝」篆(緝)に至る二十六字は、皆な「布」を言ふなり。しかして分かつべからざるもの有り、「織」篆(織)の如き、是れなり。經と緯と相ひ成すをば「織」と曰ふ。

【段注訳文】

「布」とは麻縷で織り成したものの、「帛」とは絲で織り成したもので、これらを作ることをいずれも「織」と言う。許慎はこの糸部で「布」を「絲」と区別している。「緝(緝)」

から「緝（緝）」までの二十六字は、すべて「布」に関わりのある文字である。しかし、どちらか一方に区別しきれない文字があり、例えば「織（織）」という文字がそうである。どのような糸を用いるかに拘わらず、たていとよこいと経と緯とを交互にして作成することを「織」というのである。

また、「緝」字についての説解「緝、績也。」（緝は、績なり。）の段注に、

【段注】

自「緝」篆至「緝」篆、皆説麻事。麻事與蠶事相似。故亦从糸。（糸）

凡麻臬先分其莖與皮曰朮。因而漚之。取所漚之麻而杮之。杮之爲言微也。微織爲効。析其皮如絲。而撚之。而剉之。而績之。而後爲縷。是曰績。亦曰緝。亦象言緝績。

【段注訓読】

「緝」篆（緝）自り「緝」篆（緝）に至るまで、皆な麻の事を説く。麻の事と蠶の事とは相ひ似る。故に亦た「糸」に从ふ。

凡そ麻臬は、先づ其の莖と皮とを分かつ、朮と曰ふ。因りてこれを漚す。漚すところの麻を取りてこれを杮む。「杮」の言を爲すや「微」なり。微織なるを効と爲す。其の皮を析つ

『説文解字』許敍段注についての一考察(田村(大田))

こと、まぬいと絲の如し。しかしてこれを撚る。しかしてこれを牌ぐ。しかしてこれを績ぐ。しかる後にあざいと縷と爲す。是れをば「績」と曰ふ。亦た「緝」と曰ふ。亦た象言して「緝績」と言ふ。

【段注訳文】

「緝（緝）」から「緝（緝）」までは、すべて麻の事を解説している。麻から麻糸を作る作業と蠶から絹糸を作る作業とは似ている。だから「緝」もまた「糸」を義符とするのである。

総じて麻臬は、先づその莖と皮とを分ける。それを朮と云う。その次に朮を漚す。漚した麻を取って、これを杮める。「杮」という理由は「微」と音義が相通じるからである。微細で繊細なものは出来が良い。その皮を細く裂いてまぬいと絲のよりに細くする。次に撚る。次に牌ぐ。次に績ぐ。そうした後あざいとに縷となる。これを「績」と言い、また「緝」とも言う。また、連語にして「緝績」とも言う。

とあり、ここでも、「緝」の小篆より「緝」の小篆までは、いずれも「麻」に関係する文字を説解していると、重ねて述べている。そして、麻糸の製造工程を仔細に記している。「麻」を取えて「麻臬」と累言しているのは、『説文解字』の説解で、「麻、臬也」（麻は臬なり）、「臬、麻也」（臬は麻なり）と互訓になっている

ること、「紩」の説解に「紩、分臬莖皮也」(紩は臬の莖皮を分つなり)とあり、「麻」と言わず「臬」と言っていることに鑑みただからであろう。「麻臬」から幾つかの工程を経て、最終的に「縷」となる。その「縷」を「績」とも呼び、「緝」とも呼び、累言して「緝績」とも呼ぶ。ここままで、「縷」「績」「緝」「緝績」が全て「麻糸」を表すことが確認できた。

段注の「紩之爲言微也。微織爲効。」は、許慎の「紩」字の説解を引いている。「甲之爲言乙也」の形は、先に指摘した「甲之言乙也」と同じく音訓であることを標示している。後漢の時代に大いに流行した音訓(声訓)という訓詁の原理を許慎も『説文解字』の説解で多用している。段玉裁は「紩」の説解に「麻」ではなく「臬」の文字が使われていることに注目しただけでなく、「紩」の義を考える上でも、「紩」と音の近似している「微」の「細小」、「精妙」の義をもつて「紩」の義を説明した許慎の音訓の流儀を見逃さなかつたのである。ちなみに「紩」は『廣韻』では「匹卦切」卦韻、「微」は「無非切」微韻であり、段玉裁の『六書音韻表』でも「紩」は第十六部、「微」は第十五部の異なる部に属している。十七部のうちでは比較的近似した韻ではあるが異なる部である。

いずれにしても、段玉裁は意図的に許慎の説解を注に取り込んだことは間違いないであろう。

さらにまた、「緝」字の説解、「緝、氏人殊縷布也。」(緝は、氏

人の殊縷の布なり。)に注して、

【段注】

漢武都郡、應劭曰「故白馬氏羌。」『華陽國志』曰、「武都郡有氏僕。」

殊縷布者、蓋殊其縷色而相間織之。緝之言駢也。

【段注訓読】

漢の武都郡、應劭、曰く、「故の白馬氏羌なり」と。

『華陽國志』に曰く、「武都郡に氏僕有り」と。

殊縷布は、蓋し其の縷色を殊にして相ひ間えこれを織る。

「緝」の言は「駢」なり。

【段注訳文】

漢の武都郡について、『漢書注』で應劭が「古の白馬氏羌である」と言っている。

『華陽國志』では「武都郡には、氏僕と呼ばれる人々がいる」と言っている。

殊縷布というのは、おそらく、その布を織る糸の色を一色ではなく異なる色を用いてそれらをたがいがいに織ったものである。なぜ「緝」というかという、二頭立ての馬車を駕すことを表す「駢」と音義が相通することから「ふたつ並べる」意を表すのである。

と言っている。麻に關係する二十六字のまとまりの最後の二十六字目は、漢民族ではない、おそらくは馬の飼育、乗馬に長けていたであろう異民族の「氐（羌人）」と呼ばれた人たちが織っていた、色の異なる麻糸を用いて織り成した布を表す「緝」字であった。色の異なる麻糸を用いることによって、さまざまな色合いを出すことができたであろう。また、ひとかせの糸を段染めにしたとすれば、さらに複雑な色彩に仕上がった織物ができたであろう。日本及びその周辺諸国の「緝」に類似したものだったのでないだろうか。

興味深いのは、このような織物をなぜ「緝」と呼びなすか、の説明原理である。「緝」の音と「駢」（『説文』における本義は「二馬を駕すこと」。つまり二頭立ての馬車。馬が二頭並んでいるところから、転じて列べる、並ぶの意。）の音が近似していることを根拠として言及している点である。「ならぶ・ならべる」という意味を「并」という形とその音がともに担っていて、並ぶものが「馬」なら部首は「馬」、「糸」なら部首は「糸」という關係性を、「甲之言乙也」という形式で表している。これは、周知のように清朝考證学に特徴的な「因聲求義」であり、「右文説」、さらに「音訓」にまで遡ることができる。音と意味とに必然的な關係があるという中国古来の考え方である。音符「并」の小篆は「𠄎」で、上に「人」が二人並んでおり（𠄎）、下に「二本の干が構えの上に平衡に載っている形（𠄎）」である。これは奇しく

『説文解字』許敍段注についての一考察(田村(大田))

も、縦糸に横糸を渡し交互に織り成す形を連想させる。⁽¹⁵⁾

五の四、縦糸・横糸・色彩について

本節では、「文」を明らかにするために、迂遠ではあるが、織物の縦糸、横糸、色彩について『説文解字』及び段注でどのような記述をしているかを見ていく。

五の四の一、縦糸と横糸

『説文』の糸部の前半は、おおまかに言って、絹糸に関する文字、麻糸絹糸を兼ねる文字、麻糸に関する文字、絹織物の色に関する文字の順番に親字が並んでいる。その他に、縦糸、横糸に関する文字、「經」と「緯／縲」にも言及がある。「經」は絹糸に関する、説解に「蠶「繭」「絲」のうちどれかが入っている文字群の後に置かれている。「緯」は、織機で機を織ることに関わる文字、かつ、麻にも絹にも共通で用いられる文字、すなわち「織」から「縉」の後、そして、本節のキーワード「績」の直前に置かれている。この順序には意味がある。絹糸の話をするときには糸は一本でよい。一本の縦糸があれば事足りる。しかし、布地を織るとなったら、麻布にせよ絹織物にせよ、横糸が必要となる。その後「績」が問題となる。したがって、この順序には意味がある。

まず、縦糸と横糸についての説解と段注を確認する。

【説解】

經、織從絲也。

【説解訓読】

經は、織の從絲なり。

【説解訳文】

經というのは、織物の縦糸である。

【段注】

「從絲」二字、依『太平御覽』卷八百二十六補¹⁶。

古謂「横直」爲「衡從」。『毛詩』云「衡從其畝」¹⁷是也。

字本不作「縱」、後人妄以代之。

（中略）

織尾「從絲」謂之「經」。必先有「經」而後有「緯」。

是故「三綱」¹⁸「五常」¹⁹「六藝」²⁰謂之天地之常經。

『大戴禮』曰、「南北曰經、東西曰緯」²¹。

（後略）

【段注訓読】

「從絲」の二字は、『太平御覽』卷八百二十六に依りて補ふ。

古は「横直」を謂ひて「衡從」と爲す。『毛詩』に「其の畝

を衡にし從にす」と云ふ、是れなり。

字、本とは「縱」に作らず。後人、妄りに以てこれに代ふ。

（中略）

織尾の「從絲」、これを「經」と謂ふ。必ず先づ「經」有りて後に「緯」有り。

是の故に、「三綱」「五常」「六藝」これを天地の常經と謂ふ。

『大戴禮』に曰く、「南北は經と曰ひ、東西は緯と曰ふ。」

（後略）

【段注訳文】

「從絲」の二字は『太平御覽』卷八百二十六に依りて補った。

古は「横直」のことを「衡從」と言った。『毛詩』に「麻畑の畝

を横に縦にくまなく耕す」と言っているのがその例である。

文字はもとは「縱」とは作っていないのになかったのに、後の時代の

人が闇雲に「縱」という字に代えてしまった。

（中略）

織り糸のうちの縦糸を「經」と言う。織物を織るときは、必

ずまず先に「經」（縦糸）を張ってから、それから「緯」（横

糸）を左右に通して織っていくものだ。

だから、「三綱」や「五常」や「六藝」などを天地の「常

經」というのである。

『大戴禮』には、「南北を經と言ひ、東西を緯と言ふ。」と

言っている。

（後略）

次に横糸について確認する。

【説解】

緯、織衡絲也。

【説解訓読】

緯は、織の衡絲なり。

【説解訳文】

緯とは、織物の横糸である。

【段注】

「衡」、各本作「横」。今正。凡漢人用字皆作「從衡」。

許曰、「横、闌足也。」不對「植」者言也。

云「織衡絲」者、對上文「織從絲」爲言。

故言「絲」以見「縷」。

「經」在軸、「緯」在杼。木部曰、「杼、機之持緯者也。」

引申爲凡交會之稱。漢人左右六經之書謂之祕緯。

【段注訓読】

「衡」は、各本「横」に作る。今、正す。凡そ漢人の用字

は、皆な「從衡」に作る。

許曰く「横は、闌足なり。」(※田村注・本稿の基くテキスト

では「横、闌木也」に作る。)「植」なるものに對してはこれ

を言はざるなり。

「織の衡絲」と云ふものは、上文の「織の從絲」に對して言

を爲す。故に「絲」を言ひて以て「縷」を見はず。

『説文解字』許敍「段注」についての一考察(田村(大田))

「經」は軸に在り、「緯」は杼に在り。木部に曰く、「杼は、機の緯を持つものなり。」と。

引申して凡そ交會するの稱と爲す。漢人は、六經を左右の書、これを祕緯と謂ふ。

【段注訳文】

「衡」は、各版本では「横」と作っている。ここでは正した。総じて漢人の用字では「縦横」ではなく「從衡」と作るのが一般的である。

許慎は木部で「横とは、門のように遮蔽するものである」と説解している。つまり、「横」は、門柱のように直立した木を表す「植」字と相對する文言ではない。

「織物の衡絲」と言っているのは、上文の「經」についての説解、「織物の從絲」と相對した文言である。「たて」を表す文字は「從」、「よこ」を表す文字は「衡」なのである。だから、「織從絲」「織衡絲」とだけ言い、「織從縷」「織衡縷」とは言っていないが、ここでは糸の素材に関係なく、「たて」と「よこ」とが説明できればよいので、「絲」(絹糸)と云うことで「縷」(麻糸)も包括して表している。

「經」(縦糸)は機織り機の軸にぴんと張り、「緯」(横糸)を杼に通して縦糸の間をくぐらせる。『説文』木部に、「杼は、機織り機の緯(横糸)を保持するものである。」と云っている。

このもともとの「横糸」という本義を引き申し、総じて交會するものの名称として「緯」を用いるようになった。漢人は六経を輔佐する書のことを「祕緯」と言っている。

「緯」字の次には、同じく横糸を表す文字として「縲」が配列されている。

【説解】

縲、緯也。

【説解訓読】

縲は、緯なり。

【説解訳文】

縲は横糸である。

【段注】

此亦兼布帛言之也。

「緯」亦稱「縲」者、語之轉也。「微」「文」二部、每互轉²²⁾。

『爾雅』「百羽謂之縲。」古本反。

按、此「縲」字、正許書「橐」字之段借²⁴⁾。『玉篇』云、「縲、大束也²⁵⁾」、是也。

【段注訓読】

此れも亦た布帛を兼ねてこれを言ふなり。

「緯」も亦た「縲」と稱するものは、語の轉なり。「微」「文」

二部は、每互に轉ず。

『爾雅』に「百羽、これを縲と謂ふ」とあり。古本の反。

按ずるに、此の「縲」字は、正しくは許書の「橐」字の段借なり。『玉篇』に「縲は大束なり」と云ふ。是れなり。

【段注訳文】

これも「織」と同様に、麻布と絹織物を兼ねて言っている。

「緯」と稱し「縲」とも稱するのは語音の転訛である。「微」部と「文」部の二部は、お互いに語音の転訛を起こす。

『爾雅』に「羽百枚の大きな束を縲と言う。」とある。「縲」は古本の反であるから、音は「コン」。

わたしの考えるところでは、この「縲」字は、正確にいうと、許慎が親字とした「橐」(橐)字の段借である。『玉篇』

に「縲、大束なり」と言っているのがその証拠である。

以上、ここまで、縦糸と横糸をめぐる文字の説解と段注を見てきた。段注にはある種の癖があり、それは、説解の注という形を借りて、段玉裁独自の説を展開しようとする、或いは自説を強化するための手がかりを得ようとする、そのような側面が見られることである。それが具体的にどのようであるか、末尾に付した注も合わせて微妙ではあるが明らかになったと思う。

小結

本稿では、冒頭に記した問い、①なぜ「考工記」の「青與赤謂之文」を引いたのか（例えば『廣韻』ではすでに直截に「文、文章也。又美也。善也。兆也。」と言ひ、「彰、青與赤雜。」と言つてゐる）、②なぜ「文」と「彰」との違いを本義に戻つて説明しようとしたのか、を探るために、そもそも「文」とは何か、テクニチャーを構成する「文」とはどのようなものかを明らかにする目的で、その素材となる糸（麻糸と絹糸）と織物（麻布と絹織物）、その基本になる縦糸と横糸について、説解と段注を見てきた。迂遠なようではあるが、「文」の本質を追究するには、前掲の拙論で明らかにしたように、古の始めには絵画も刺繍も文字も全て一類の「施色の工」と見なすことが妥当な出発点となる。そして、その延長上に、糸と織物があり、そこに「文」の本質を見ることができると考えられる。換言すると、前掲の拙稿（上篇）では、絵画などの平面上の二次元世界における「文」を、本稿（中篇）では、織物という三次元世界における「文」のありようを明らかにした。さらに次稿（下篇）では、色彩を表す「帛」の名称へと論を進め、「文」と「彰」の本義に段玉裁が言及した理由を明らかにしようと思う。

次稿は本稿の続きから、五の四の二、麻布か絹織物か、五の四の三、帛の色について、六、「文」と「彰」について、七、許慎

『説文解字』許慎段注についての一考察(田村(大田))

の「文」の定義を引用した意味についてへと論を進める予定である。(続)

注

(1)「交文」は、「文」字の説解以外にも『説文』中に見られる。例えば、「网」字の説解に、「网、庖犧氏所結繩曰田曰漁也。从宀。下象网交文。」(网は、庖犧氏の繩を結びて曰て田つくり曰て漁するところなり。(※田村注…以上、『周易』「繫辭傳」の文。)「」に从ふ。下は網の交文に象る。)とあり、また、「鬲」字の説解に、「鬲、鼎屬也。實五穀。斗二升曰穀。象腹交文三足。」(鬲は、鼎の屬なり。五穀を實す。斗二升をば、穀と曰ふ。腹の交文、三足に象る。)とあり、段玉裁は「上象其口、X象腹交文、下象三足也。」(上は其の口に象り、Xは腹の交文に象り、下は三足に象るなり。)と言つてゐる。(※田村注…「X」は「交(X)」字の上部である。また、「文」字の下部、「交」字の下部は、「交」字の下部「父(X)」と共通している。)
「文」を解字すると、交わる線(織物の縦糸と横糸、平面上の線、文字の筆画など)の頭、つまり始まりの部分であり、「交」を解字すると、二手に分かれた二本の線(または二手に分かれた線の束)が再び交わる形、「交」は交差を繰り返す形と解釈できる。そうすると、「文」は「交文」である、というのも、単なる同語反復ではなく、織物に喩えれば、縦糸と横糸が交差し始める最初の織り始めの部分、すなわち、最初に交わり始める形と理解することができ。この解釈は、「五の一、績について」で論じる、「績」字に始まる糸部の文字についての議論に繋がっていく。

(2)この二句は「周易」繫辭上」の文。「方以類聚、物以羣分、吉凶生也」(方は類を以て聚め、物は羣を以て分かつては、吉凶、生ずるなり)とある。韓康伯の注に、「方有類、物有羣、則有同有異、有聚有分也。順其

所同則吉、乖其所異則凶。故吉凶生矣。」(方に類有り、物に羣有れば、則ち同じき有り、異なる有り、聚まる有り、分るる有るなり。その同じきところに順じれば則ち吉、その異なるところに乖けば則ち凶なり。故に、吉凶、生ずるなり。)とある。

(3) この句は『周易』「繫辭下」の文。「子曰、乾坤其易之門邪。乾、陽物也。坤、陰物也。陰陽合德而剛柔有體。以體天地之撰、以通神明之德。其稱名也、雜而不越。」(子、曰く、乾坤は其れ易の門なるや。乾は、陽物なり。坤は、陰物なり。陰陽、徳を合はせて剛柔、體有り。以て天地の撰を體り、以て神明の徳に通ず。其の名を稱するや、雜りて越へず。)とある。「雜而不越」とは、韓康伯の注によれば、「備物極變、故其名雜也。各得其序、不相踰越」(備物は極變す。故に其の名は雜るなり。各々其の序を得て、相ひ踰越せず)、すなわち、万物は様々に変化するため、それらを表す名称は雜然として混じりあっているが、それらには法則があり、その法則に則って互いに則を踰えないのである。この部分の主旨は、許敘末尾に「分別部居、不相襍廁」(分別して部居せしめ、相ひ襍廁せず。)とあるのと同じ。分別して五百四十部となし、それぞれの部首に属する文字が互いに部首を越えて雜居しないように配置したということ。

(4) この句は『周易』「繫辭下」の「窮神知化、徳之盛也」に依る。『正義』には「窮極微妙之神、曉知變化之道。乃是聖人徳之盛極也。」(微妙の神を窮極し、變化の道を曉知す。乃ち是れ聖人の徳の盛にして極まれるなり。)とある。

(5) 『説文解字』第十四篇下の最後、亥部の「亥」字について、許慎は次のように言っている。「𦘔、亥也。十月微易起接盛會。从二。二、古文上字也。一人男、一人女也。从ノ。象褻子咳咳之形也。……(中略)……亥而生子、復從一起。」(𦘔は、亥なり。十月、微易起り盛會に接す。二に从ふ。二は、古文の「上」字なり。一人は男、一人は女なり。ノに从ふ。子の咳咳するを褻くの形に象るなり。……(中略)……「亥」にして子を生子、復た「一」從り起る。)「亥」の説解の前半は、十二支の文

字の説解と同様、陽の氣と陰の氣のありようについての記述である。許慎は「亥」は「亥」であるという。「亥」とはすなわち「草の根」であり、十月には、根に下りていた陽の氣が地中から微かに起り、盛んな陰の氣に接するといふのである。説解の後半は、「亥」字の構造についての解釈で、「上」字の古文「二」は天を表し、その下に男女がいる。そして、女が子どもを懐に抱き、子どもが声を立てて笑っている。その形に象っていると解く。そして最後に、「亥」は男と女がいて子が生まれ、その子が「一」となって始めて戻り、復た「一」から始まると言う。

(6) 後の「廣韻」には「續」は「胡對切」とあり、「遺」は「以追切。失也、亡也、賸也、加也。又姓。『急就章』有『遺餘』。又、『以醉切。』」とあり、声母も韻母も異なっているが、段玉裁の『六書音韻表』では「續」も「遺」も十五部である。

(7) 国立国会図書館デジタルライブラリーの南宋・王應麟撰『玉海』二〇四卷附刻十三種(慶元路儒學刊、至元六年)所収の『急就篇』(漢・史游撰、唐・顏師古注、宋・王應麟補注)巻第一、章十五に「承、塵、戸、幃、條、續、縦」と、一句七字ひとつの類にまとめられている。

(8) 王應麟の補注には「碑本□作□、續作墳。顏本縦作總。」とある。(※田村注：□は判読できない文字。)

(9) 元・黃公紹編撰、元・熊忠舉要の『古今韻會舉要』慣韻に、「續、説文」織餘也。一曰晝也。从糸、貴聲。」と「説文」が引用され、ここには「一曰晝也」の四字が見える。

(10) 段注で言う「此卷」とは、徐鍇の『説文解字繫傳』の巻第二十五のこと、糸部から卯部までが開けている。この巻は早くに散佚し、古く宋本のころから欠けていた。現在の小徐本巻第二十五は大徐本によって補ったものである。(頼惟勤『説文入門』一九八三年、三十六頁による。)南宋・王應麟『玉海』巻第四十四、藝文類、小學の項に、「説文解字繫傳四十卷、南唐・徐鍇^{楚金}傳釋、朱翱反切、案、鍇系述、通釋一至三十、部叙三十一至三十二、通論三十三至三十五、……(中略)……系述四十。今亡第二十五卷。」とある。(前出の国立国会図書館デジタルライブラ

リ一藏「玉海」卷第四十四、十九葉～二十葉、「藝文」類の「小學」の項に見える。）

(11) いま見る十三經注疏本「周禮」では、「鐘」は「鍾」に、「幌」は「幌」に作っている。阮元の校勘記では、「鍾」について「鐘」に作るの誤りだとしている。また、「幌」については、「説文」に依拠して、「幌」ではなく「幌」に作るべきで、「部首は巾、炗は音符」であると言っている。

また、「畫、績、鐘、筐、幌」について、「周禮正義」では、「施色之工五。畫績二者、別官同職。共其事者、畫績相須故也。鐘氏、染鳥羽。筐氏、闕。幌氏、主漚絲。」(施色の工は五つあり。畫、績の二者は官を別にし職を同じうす。其の事を共にするものにして、畫、績、相ひ須く故なり。鐘氏は鳥羽を染む。筐氏は闕。幌氏は絲を漚すを主る。)と説明している。「考工記」に「畫、績」については「畫績之事、雜五色。」(畫績の事、五色を雜す。)から始まり「凡畫績之事、後素巧。」(凡そ畫績の事、素巧を後にす。)まで「畫」「績」をまとめて述べ、次に「鐘」について「鐘氏、染鳥羽以朱、湛丹秫三月而熾之。」(鐘氏は、鳥羽を染むるに朱を以てし、丹秫に湛すこと三月にしてこれを熾く。)から始まり、最終的にその羽毛を「緇」(黒色)に染める工程が説明される。

「筐」については「筐人、闕」とあり、闕文になっている。「幌氏」については、「幌氏、凍絲以沑水、漚其絲七日、去地尺暴之。晝暴諸日、夜宿諸井、七日七夜、是謂水凍。……」(幌氏は、絲を凍るに沑水(水)を以てし、其の絲を漚すこと七日、地より去ること尺にして、これを暴す。晝は諸を日に暴し夜は諸を井に宿ること七日七夜、是れ水凍と謂ふ。……)から始まり、蛤の貝殻を粉にした灰汁を用いて帛(絹織物)を白くする工程が詳細に説明されている。

(12) 「糸」は「細絲」(細い絹糸)のことであるから、本来、麻糸は含まない。「糸」字の説解に「糸、細絲也。象束絲之形。」(糸は、細き絲なり。束ねし絲の形に象る。)と言っている。しかし、麻から麻糸を作る工程と蠶から絹糸を作る工程とは似ているので、麻糸や麻布に関係した

『説文解字』許敍段注についての一考察(田村(大田))

文字も糸部に属している。だから「亦」と言っているのである。

(13) 『漢書』卷二十八下「地理志」第八下の「武都郡」の應劭の注に、「古白馬氏羌。」(古の白馬氏羌なり。)とある。

(14) 『華陽國志』卷二「漢中志」に、「武都郡、本廣漢西部都尉治也。……(中略)……東接梓潼、西接天水、東接始平、土地險阻、有麻田。氏僕、多羌戎之民。」(武都郡は、本と廣漢西部都尉の治なり。……(中略)……東は梓潼に接し、西は天水に接し、東は始平に接す。土地は險阻にして麻田有り。氏僕は羌戎の民多し。)とある。

(15) 『説文解字』从部に、「𠂔、相從也。从从、𠂔聲。一曰从持二千爲𠂔。」(𠂔は、相ひ從ふなり。从に从ひ、𠂔の聲なり。一に曰く、二千を持つに从ふを并と爲す。)とある。部首の「从」は、「𠂔、相聽也。从二人。」(𠂔は、相ひ聽くなり。二人に从ふ。)、つくりの「𠂔」については単に音符とする説と、二人が二本の竿を持つ(段注によれば、一人一本の竿を持った人がふたり並んでいる様から併合の意を表すという)形に象っているとする説と、二説を載せている。

また、『説文解字』𠂔部には、「𠂔、平也。象二千對構上平也。」(𠂔は、平なり。二千、構上に對して平らかなるに象るなり。)とある。

(16) 『太平御覽』卷第八百二十六「資産部六」[織]の項に『説文解字』が引かれている。「説文曰、織、作帛惣名也。經、織從絲也。緯、織橫也。經、綜、機縷也。績、績、機餘也。」(『説文』に曰ふ、「織は、帛を作る惣名なり。經は、織の從絲なり。緯は、織の横なり。經、綜は、機縷なり。績、績は、機餘なり。)」

(17) 『毛詩』「齊風・南山」に、「蓺麻如之何、衡從其畝」(麻を蓺る、これを如何せん。其の畝を衡にし從にせん。)とある。麻を植えたいのならどうすればよいか。必ず先ずその畑を横にも縦にもくまなく耕して、そうして後に始めて麻を植えることができ、やがて麻を取獲することができる、の意。(鄭箋によれば、妻を娶る場合は必ず先に父母に挨拶し許しをもらうべきであることを喩えているという。)

(18) 『白虎通德論』卷第七「三綱六紀」に、「三綱者何謂也。謂君臣父子夫婦

也。(中略)故君爲臣綱、父爲子綱、夫爲妻綱。」(三綱は何の謂ひぞや。君臣、父子、夫婦を謂ふなり。(中略)故に君は臣が綱爲り、父は子が綱爲り、夫は妻が綱爲る。)、また、「何謂綱紀。綱者張也。紀者理也。大者爲綱、小者爲紀。所以強理上下、整齊人道也。」(何をか綱紀と謂ふ。綱は張なり。紀は理なり。大なるものは綱と爲し、小なるものは紀と爲す。上下を強め理め、人道を整へ齊しくする所以なり。)とある。「綱」の説明に、君臣、父子、夫婦の「上下」關係を正しく導くよう勉め秩序を保つとあることから、天地上下を結ぶ垂直軸と、縦糸の「經」のイメージが重なる。

(19)『白虎通德論』卷第八「五經」に、「經所以有五、何。經、常也。有五常之道。故曰五經。樂仁、書義、禮禮、易智、詩信也。」(經に五有る所以は、何ぞや。經は、常なり。五常の道有り。故に五經と曰ふ。樂は仁、書は義、禮は禮、易は智、詩は信なり。)とある。

(20)『禮記』「經解」に、「孔子曰、入其國、其教可知也。其爲人也、溫柔敦厚、詩教也。疏通知遠、書教也。廣博易良、樂教也。絜靜精微、易教也。恭儉莊敬、禮教也。屬辭比事、春秋教也。」(孔子曰く、其の國に入れば、其の教へ知るべきなり。其の爲人や、溫柔にして敦厚なるは、詩の教へなり。疏通にして遠きを知るは、書の教へなり。廣博にして良きに易ふるは、樂の教へなり。絜靜にして精微なるは、易の教へなり。恭儉にして莊敬なるは、禮の教へなり。辭を屬し事を比するは、春秋の教へなり。)とある。

(21)『大戴禮』「易本命」に、「凡地東西爲緯、南北爲經。」(凡そ地の東西を緯と爲し、南北を經と爲す。)とある。

(22)『六書音均表』では、「緯」は微韻で第十五部、「經」は文韻で第十三部。「微」部「文」部の二部は互いに語音の転訛を起すと言っている以上、声母と韻母が近似していないと説明できないので、ここでは「經」の音が「王問切(音は「暈」)であること」を前提として説明していると考えられる。ただし、「緯」は平声、「經」は去声なので四声が合わない。「爾雅」の引用ではわざわざ「古本反」(見母、吻韻)と付言して

いることから推察すると、音転を言う以上、「古本反」ではない説音を想定していると解せざるを得ない。再考を待つ。

(23)『爾雅』「釋器」に「羽本謂之翮。一羽謂之箴、十羽謂之縛、百羽謂之經。」(羽本、これを翮と謂ふ。一羽、これを箴と謂ひ、十羽、これを縛と謂ひ、百羽、これを經と謂ふ。)とある。羽の本を翮と言う、というのは鳥の羽の根本の呼び名。一羽から百羽までは、羽の数の多少を区別して言うときの束の単位を表す呼称である。段玉裁がこの注で「爾雅」の「釋器」を引用したのは、「緯」、「經」と続く二字の前に、「絡」字があり、説解に「綱、緯十縷爲絡」とあり、緯十縷を束にしたときの単位としての呼称が記されていることと關係があるかも知れない。

(24)「藁」は「說文」藁部の部首。「許書藁字之段借」とは、説解に「藁、藁也。从東、國聲。」(藁は藁なり。東に从ひ、國の聲。)とあり、段注に「廣韻」を引いて「藁、大東也。」(藁は大東なり。)と言ひ、ここでは「玉篇」を引いて「緯、大東也。」(緯は大東なり。)と言ふことで、「緯」が「藁」の仮借字であることの証左としている。つまり、「緯」は「藁」の仮借字であるから、「大きな束」の意であり、「緯」の意ではないはずだ。このように考えれば「たていと」を表す字も「よこいと」を表す字も、それぞれ「經」と「緯」の一字ずつとなる。段玉裁は「緯」字が親字としてあることがリダンダントだと考えたのではないだろうか。だから、「語之轉」という説明原理を用いて「緯」は「緯」の音転によるヴァリエーションに過ぎず、本来的には仮借字として機能していた文字であることを「爾雅」や「玉篇」を持ち出して傍証しようとしたのではないだろうか。段玉裁が注において用いる「正許書A字之段借」という表現は、段玉裁が親字の妥当性自体に関して評定を下す場合に限られる。

(25)『大廣益會玉篇』糸部には「緯、古本切。大東也。」(緯は、古本の切。大きな束なり。)とある。

参考文献

〈調点本〉

平鏡胤(平田鏡胤) 調点並校『説文解字序』(江戸) 伊吹廼屋、出版年不明

〈著書〉

福田襄之介『中國字書史の研究』明治書院、一九七九年初版、一九八二年第三版

頼惟勤「監修・説文会」編『説文入門——段玉裁の「説文解字注」を読むために——』大修館書店、一九八三年

阿辻哲次『漢字学——「説文解字」の世界——』東海大学出版会、一九八五年(新装版二〇一三年)

近藤光男『清朝考證學の研究』研文出版、一九八七年

木下鉄夫『清朝考證学』とその時代』創文社、一九九六年

吉田純『清朝考證学の群像』創文社東洋学叢書、二〇〇六年

木下鉄夫『清代学術と言語学——古音楽の思想と系譜——』勉誠出版、二〇一六年

〈論文〉

田村(大田)加代子『「説文解字」「許敍」の「庶業其聳」句について——「其」字の解釈をめぐって——』『名古屋大学文学部研究論集』文学六十一、127-148頁、名古屋大学文学部、二〇一五年三月

田村(大田)加代子『「説文解字」「許敍」段注についての一考察——「文者錯畫也」をめぐって(上)——』『名古屋大学文学部研究論集』文学六十二、191-213頁、名古屋大学文学部、二〇一六年三月

〈訳註〉

岡村繁「説文解字叙」段注箋釈(一)『久留米大学』比較文化研究所紀要』第二輯、1-83頁、久留米大学比較文化研究所、一九八七年

「説文解字叙」段注箋釈(二)『久留米大学』比較文化研究所紀要』第三輯、67-97頁、久留米大学比較文化研究所、一九八八年

「説文解字叙」段注箋釈(三)『久留米大学』比較文化研究所紀要』

『説文解字』「許敍」段注についての一考察(田村(大田))

要』第五輯、77-133頁、久留米大学比較文化研究所、一九八九年

田村(大田)加代子『「説文解字」「許敍段注」訳注の試み(一)』『鑿鑿』第二

十二号、3-30頁、中国人文学会、二〇一四年九月

田村(大田)加代子『「説文解字」「許敍段注」訳注の試み(二)』『鑿鑿』第二

十三号、3-16頁、中国人文学会、二〇一五年九月

田村(大田)加代子『「説文解字」「許敍段注」訳注の試み(三)』『鑿鑿』第二

十四号、2-22頁、中国人文学会、二〇一六年九月

キーワード：説文解字、段玉裁、文、絲、麻

Abstract

Duan Yucai (段玉裁)'s Notes on the Preface of *Shuowen-Jiezi* (說文解字) written by Xu Shen (許慎):
 A Thought about Duan Yucai's connotation of the Note:
 "Wen (文) means crossed lines, Wen (𠄎) means coloring."

Kayoko (Ota) TAMURA

The goal of this article is to find out the basic meaning of Wen (文) through the comments of Duan Yucai on the several words concerning silk (麻・縷) and linen (帛・絲). By way of reading Duan Yucai's comments carefully, I concluded that Wen (文) means not only the lines on two dimensions, but also means the lines existing in the three dimensions world.

Duan Yucai's comments lead me to the new understanding of the Chinese Character's world and to the new horizon of the idea how *Shuowen-Jiezi* is constructed.

At the same time, I succeeded to clarify the hidden intention of Duan Yucai by connecting his comments on different words, namely on the words concerning silk and line. I created a multi-linguistic and an interesting way of seeing the world of *Shuowen-Jiezi*, by which I try to replay how he realise his own linguistic thinking.

Keywords: *Shuowen-Jiezi*, Duan Yucai, "Wen (文・𠄎)", silk, linen